

あとがき

私が俳句を作りはじめるようになったきっかけは、毎日新聞の「千葉」のページに載っている『房総文園』（毎週金曜日）に興味を持ったことにある。一九九七年九月のことで、その後約四年余の二〇〇一年、その年の年間賞の一つである「青の賞」（奨励賞）に選ばれた。授賞式で以下の謝辞を述べた。

第八回「青の賞」にお選びいただきました花井透と申します。句歴四年と三ヶ月ばかりのまだまだ未熟な者でございますが、この受賞を一つの節目としてこれからも精進を重ねてゆければ、と思っております。

私が『房総文園』へ投句をはじめようになつた大きな理由は、巻頭句への村山さとし先生の【評】にたいそう心ひかれるものがあつたからです。元来私は、俳句を含めて文芸一般に何がしかの興味を抱いてはいたのですが、ある時から『房総文園』俳句欄に目がとまり、とりわけ巻頭句への【評】に述べられている心が、ほとんど私自身の心と共鳴することを自覚しはじめたのです。自分がこれからも生きていく中で湧きおこってくる詩心を、なんとかか五・七・五に詠い込んでみたら、この選者の心に届くものがあるかも知れない、と思つたのです。

まったくの我流で、生まれてはじめての俳句らしきものをひねりあげ、即投稿、先生の手直しが入つて末席に入選。今から思えば、無手勝流もよいところでした。それから今日まで、苦吟の連続です。昨今の日本の医療政策は、患者さま、御家族の皆様立場に立つた親切で良い医療を展開し

ようとすればするほど、経営的には厳しさが大きいのしかかつてきまず。そんな時には作品がどことなし暗いものばかりで、往生したこともありました。

村山先生が私の大学時代の恩師のお一人であることは、一九九八年八月二十六日の紙面に掲載された先生の文章をお読みしてはじめて知ったわけなのですが、本日、こうして、先生にお会いできたこと、学生時代には講義をサボり、試験も落第つづきの劣等生だった私ではなくて、『房総文園』紙上から読み取れる先生の御指導を、毎週、真面目に受けとめ、この四年間あまり、本業の医学書の冊数をはるかにしのぐほどの俳句関連の本を買い求めて勉強している俳句好きの人間の一人として先生にお目にかかれる日が来たことに、心から感謝を申し上げたいと存じます。

また本日、はじめにお会いすることが出来ました皆さま、人生の先輩であり、そして俳句の先輩である皆さまの素晴らしい作品から、これからも多くのものを学びとらせていただきながら、私自身の心を豊かにしていきたいと存じます。

本日はありがとうございます。

その後いくつかの結社誌や新聞への投稿を試み、もちろん『房総文園』へは現在も投句をしつづけているが、あいかわらず自己流、無手勝流で、我ながら駄作ばかりで閉口している。

故兄花井保に〈自適かと書かれて苦し年賀状〉という句がある。七十五才になろうとしている人生、医師不足のつづく今の日本ではまだまだ仕事はやめられず、憲法九条を守り、反核・平和の運動にエネルギーを注ぐことをやめるわけにはいかない社会状況がつづいている。〈自適〉に、結社とは限ら

ないが、集団の中で直接にもまれて腕を磨くことに踏み出さなければ、と思うものの果せないでいる。

この句集は、人生の一つの節目にあたって編んでみた。最初で最後のものとなろう。やがて喜寿を迎える妻敏子の、折々に描いた絵や書などで、頁を飾ってもらった。型破りの身勝手な体裁の句集となったが二人の共同の記念事業ともなった。

今回の上梓にあたり、村山さとし先生に深謝申し上げます。『房総文園』での【評】などの掲載をお許しいただきましたこと、たいへんありがとうございました。先生の文章がなかったらどれほどに淋しい本になったことかと思っております。

また光陽出版社・株式会社光陽メディアのみなさまには大変お世話になりました。

ました。特に遠藤修様には、二〇一五年二月以降、本造りについて右も左もわからず、それにもかかわらず色々注文をつけてしまう私とお付き合いをいただきました。まことにありがとうございます。

この句集を手を取っていただいた皆さまには、どこかでお会いした時に、一声でもかけていただければ幸いです。

二〇一五年晩夏

著者